

旭川市

井上靖記念館報

創刊号



茨木時代の父

浦城 いくよ

父井上靖は、昭和十二年二月に当時の大阪毎日新聞社に入社したが、七月に日中戦争が勃発すると、九月には招集を受け中国に渡った。しかし間もなく脚気を患い、翌十三年一月には内地送還になり、三月に召集解除になつて四月から学芸部に復帰した。当時、大阪府茨木町に住んでいた私の叔母安藤たねの世話で通勤に便利な茨木町下中条の借家に住むことになった。父の三十才の時であり、その後、家族は鳥取県日野郡へ疎開をしたり、父の郷里伊豆湯ヶ島に移つたりしたが、父は昭和二十三年四月に単身上京するまでの丁度十年間を茨木町に住んだ。このはるか昔の大阪府茨木町時代のことを思い出して書いてみよう。

この家は省線電車の茨木駅から数分のところにあつた。家の前と左横が田んぼに囲まれ正面に赤いレンガの塀がある同じつくりの家が二軒並んで建っていた。一階が玄関、台所、風呂、便所と和室が三室と縁側、二階には和室が六畳と四畳半の二室あつた。延べ三十坪くらいの建物で南側に小さな庭がついた日当たりと風通しのよい家だつた。

昭和十八年四月、私はここで当時の国民学校に入学したが、入学式当日はハシカに罹つていて出席できず、後日、父に連れられて初めて学校に行ったときのことをよく覚えてい

にあたり、たつぷり四十分くらいかかるとも遠い距離だつた。小学校入学まではほとんど京都の母方の祖母に育てられ、大変なおばあちゃん子だつた。両親にもあまりなつかず、あまり子供達とも遊んだことがなかつたので、子供達の輪の中に入ることができなかつたらしい。父はそういう私を余程不憫に思ったのか、後年まで「幾世は一人でポツンとしていた」とよくこの頃のことを言っていたが、私自身はいじめられたり淋しい思いをした記憶はあまりない。



戦争も末期になり、食糧も厳しくなり始めると、母は近くの働き手のいなくなつた畑を借りて家族のために朝は四時起きで野菜を作っていた。よく陽が当たり、作物はよくできた。近所のご主人たちは休日には朝から畑を耕したり、手伝つたりしていたが、父は休日はいつも書齋で本を読んでいて、一度も手伝つてくれなかつたと母は言っている。そういえば母は後年、今度は生きるためではなく、父の野菜嫌いを無くすため庭で野菜作り

に励んでいたが、ただの一度も父がスコップやくわを持つているのを見たことがない。

いつも勉強で家庭のことなどしたことがない父であつたが、さすがに昭和十九年になる徴用で牛乳配達がいなくなつた近くの牧場から、母は見つけて買って来た自転車に毎朝長男の修一を前に乗せて、当時は大切な栄養源だつた牛乳を一升ビンを持って取りに行つていたので思い出す。ご近所の分も一緒に買ってきてあげていたようだ。ある日、トラックにぶつかつて前に乗っていた修一が溝に落つちてしまったことがある。運転手が驚いて降りてきたら、青い顔をして「面白かつたよ」と言つたさうである。幸いたしい怪我もなかつたようで、父は「驚いたね、小さいくせにこいつはよく気を使う奴だ」とうれしそうに感心をしていた。

その後、事情があつて短期間だが、私は父と二人だけでこの家に住むことになった。母によると、父は食事を作ることは全くできなかったので、味噌汁、おひたし、てんぷらの作り方を伝授したという。私は今の言葉でいえばかぎつ子になって、学校から帰ってくるいつもテーブルの上に両端に穴のあけられたカーネーション印の練乳の缶が置いてあつた。当時は甘いものどころかお米も野菜も手に入りにくい時代だつたのに、父はどうやって私のために練乳缶を手に入れてきたのだろうか。缶の横には「これをおやつにして待つていなさい」と書いたメモがいつも添えられていたのを子供時代の思い出として強く印象に残っている。そのせいか私は今でも練乳が大好きでコーヒーに入れたり、イチゴにつけたりして楽しんでい

自主事業の概況報告

◆文学講演会 『井上靖と童話』



とき 平成十二年五月二十七日
ところ 井上靖記念館
講師 宮崎潤一氏

【講演概要】

井上靖は小説だけではなく童話も書いている。作品は、

「どうぞお先に」(昭二十三年)
「くもの巣」(昭二十三年)
「ほくろのある金魚」(昭二十五年)
「ひと朝だけの朝顔」(昭二十六年)
「星よまたたけ」(昭二十七年)
「三ちゃん」と鳩(二十九年)
「猫が運んできた手紙」(初出不明)
「銀のはしご」(昭五十三年)
なぜ、井上靖が「童話」を書いたのかという点に触れたい。昭和二十三年当時の井上家の子供たちは長女幾世(十歳、

父が茨木に住んだ十年間は、父の丁度三十代に当たり、戦争から戦後にかけて国民全体が生きるか死ぬかの大変な時代であった。この期間大阪毎日新聞社芸芸部に席を置き、宗教欄や美術欄を担当した。仏教や美術を勉強し、画壇関係の取材などを通じて上村松園、橋本関雪、河井寛次郎等々の多くの芸術家や学者と交流を深めていった。この時代には相当の読書をしたようで新聞社の図書貸出しカードにも井上靖の名が多く書かれていたそうである。この時代の新聞社の雰囲気や小説「あすなる物語」に「新聞社内はあすなるでいっばいだ。誰も彼もあすなるだった。その日その日があすなるの生活だった。明日は特種を取ろう。明日は他紙の連中の鼻を空かせてやろう。そんな競争意識で編集局内を忙しく出入りしている連中ばかりだった。」と描いている。

五年生)、故加代(存命であれば八歳)、長男修一(六歳)、次男卓也(四歳)、次女佳子(三歳)となっている。

このことから、自らの家族をモデルにしたか、あるいはわが子に読ませることを意識したものと考えられる。

実際、靖は「私は四人の子供を持っておりすが、一中略一私は自分で読んでみて、ぜひ子供に読ませたいと思うものにぶつつかると、それを子供に与えましたが、どうも面白がって読まないというのが実情でした」と、言っていることから、子供の情操にプラスするもので、面白いものを心掛けて作品を書いたと語っている。

また、同じ昭和二十三年には『きりん』という子供の詩、作文を中心とした雑誌に靖が積極的に参加して創刊されたのも、戦後の荒廃した時代背景から、「子供たちのよさが響きあい、さらに何が創造できないだろうか」「今、最も必要なのは美しい子供の詩と童話の雑誌だ。その最も美しいものを作る」という靖の考えが基本となっている。

さらに、井上靖の「詩精神」ということとは何かというと、「人生の根底に深く揺さぶりがけるもの」「普遍的なもの」「美の追求」などといえる。一本の木に例えると、根には「詩精神」「詩」があり、枝には童話があったり、小説があったり、学生時代の柔道があったり、伊豆での特殊な生活があった。童話には、倒れることのないたくましい『詩精神』が大切なのであろう。

◆文学散歩



しおりの表紙

今年度は郊外に足に向けた文学散歩を企画してみました。当日はさわやかな天候に恵まれ、足も軽やかでした。

講師の東先生からは国木田独歩や高橋揆一郎のエピソードを聞き、かつ歌志内の風土や歴史に触れ、いっそう文学の深さを感じ取ることができました。



文学散歩

また、この地は三浦綾子が旭川の女学

校を出て、すぐ小学校の教師として赴任したことで知られていますので、当時の校舎は現存はしていませんがその跡地を訪ねてみました。

◆ロビーコンサート

とき 平成十二年七月二十九日

ところ 井上靖記念館

演奏者 斎藤治道氏(ギタリスト)

佐藤道子氏(声楽)

【主なプログラム】

- ギター独奏
- ・リユートのための六つの小品
- ・入江のざわめき(アルベニス)
- 独唱
- ・ものけ姫(映画音楽)
- ・私を泣かせて下さい(ヘンデル)
- 歌とギター
- ・五つの歌曲(ダウランド)



文学から少し離れ、気分転換を図ってみました。小規模とはいえ質の高い演奏会となり、参加者に喜んでいただきました。

◆文学講座

【高村光太郎の青春】(第一回)

とき 平成十二年八月二十六日

ところ 井上靖記念館

講師 片山晴夫氏(教育大教授)

【講演概要】

高村光太郎の父・光雲は上野の西郷隆盛を作った人。木調師であり、仏師。いわゆる高村グループのリーダーであり、棟梁のような存在。

父は頼まれ仕事を光太郎に継がせようとしていた。二十才の頃までの光太郎は素直に父に従っていた。しかし、芸大に入った頃から、新しく外から持ち込まれる芸術に傾倒していく。

そこで、父は光太郎をアメリカに留学させ、光太郎は彫刻家の助手をしながら学ぶ。

二十五才を過ぎた頃、フランスのパリを訪れ、光太郎は大きな衝撃を受ける。分厚いヨーロッパの伝統にカルチャーショックを受け、カトリックが生活に生きている現実を目の当りにする。ここで、光太郎の芸術家としての一生がبارリで決まる。

帰国後、光太郎は高村家の長男としての重い責務と、新しい芸術家としての己の自立を図ろうという狭間で苦しむ。加えて、ロダ



ンを論じて日本の芸術家を批判したことなどから、公私共に孤立してしまう。このよう

会い、結ばれる。この三十才前後が『道程』の頃であった。

【島崎藤村の文学】(第二回)

―『破戒』から『春』へ―



とき 平成十二年九月十六日

ところ 井上靖記念館

講師 片山晴夫氏(教育大教授)

『破戒』：明治三十九年

『春』：明治四十一年

『家』：明治四十三年

明治四十年代は日本近代小説が出てくる頃。明治二十年が発刊期、試作期。こうした過程を経て、明治四十年代に日本の文学を担うことになる現代文学の原形が確立していく。夏目漱石は、「小説とは何を書いても構わない。そして読む方もどこから読んでもよい。自由な文学」と位置づけた。

『破戒』はこうした時代の中で、現代小説のものになるような言文一致の文体として試みられた。また、『春』『家』は自伝的小説としてスタートを切ったといえる。

◆コンサートと詩の朗読会の夕べ

とき 平成十二年十月八日

ところ 井上靖記念館

出演 斎藤治道(ギタリスト)

山本朝香(ギタリスト)

旭川詩人クラブ(六名)

【プログラム】

井上靖詩集

『北国』～『流星』

『季節』～『青春』

『遠征路』～『新しい年』

『星欄干』～『無声堂』

『シルクロード詩集』～『海・沙漠』

『漆胡樽』

『井上靖文学碑文』



と運命的な出会いから詩が生涯を貫き通す柱となる。



以来、詩への関心が強まり、折りある毎に詩作に努め、八編の詩集を発行した。今回はこの中から七篇を選び、味わった。

「秋」
カチリ
石英の音
秋

井上靖は沼津中学で藤井寿雄の三行詩「秋」

◆読書会

『風濤』を読む

とき 平成十三年一月二十日

二十七日

二月三日

十日

計四回実施

ところ 井上靖記念館

講師 秋岡康晴氏(藤高校教諭)

【読書会の様子】

昭和三十三年に読売文学賞を受賞した。

小林秀雄は、「これは、大変綿密に書かれた作である。作者は、読者のことを、少なくとも大多数の井上文学愛好者を顧慮せず、ひとりで存分に才能上の工夫を凝らしたように思われる」と書評に述べている。

このことは、この作品の難解さを示唆しているといえる。従って、講師の秋岡先生が参加者に作品のよさを味わってもらうための配慮から、毎回適切なプリント資料を用意され、かつ説明を加えつつ輪読形式で進めていった。



読書会は秋岡読書会に移行して続く。

参加者からは「元寇」という史実を反対の側からみつけたところにおもしろさがあった」と。この

ふるさと旭川訪問

明治40年5月6日(1907)

井上靖は、旭川町第2区3条通り16の2(現在の2区6条)の第7師団の官舎で生まれる。2等(陸)軍医であった父の従軍により、1年あまりで、母と共に旭川を離れ、伊豆に帰っている。

昭和30年7月12日(1955) (48歳)

文藝春秋社の文化講演会のため来旭

初めての出生地旭川の訪問は、靖48歳の時であった。「出生地の話」高校エース8月号で、来旭の感想を述べている。又、この日官舎のあった場所(現在の2区6条)あたりを訪ねている。第四高等学校(旧制金沢)時代、自分の詩が、初めて活字になった雑誌「日本海詩人」の主催者、大村正次(戦後、旭川東高等学校の教師)と北海ホテルのロビーで再会し旧交を喜びあう。

昭和35年5月末日(1960) (53歳)

NHK公開講演のため来旭

日程等については不明である。NHK旭川放送局から記念品として、武石壯美作の木彫「シシャモ」のふたつきのハガキ入れの木箱が贈呈されている。



昭和54年(1979) (72歳)

北海道新聞社の文化講演会のため来旭

旭川東高の講演会は、井上靖の「普通高校で話したい」という希望から急きよ実現した。(当時の報道)「堀口先生のこと」昭和55年2月の中で、この時の来旭の印象が語られている。当日、車で春光地区を巡り、北鎮記念館(自衛隊内)を見学している。

平成2年9月19日~20日(1990) (83歳)

旭川市100年記念式典のため来旭

この時、井上靖記念館設置の構想が具体化する。来旭の4ヶ月後の平成3年1月29日、急性肺炎のため死去。83歳の生涯を終える。

◆「文学散歩」に参加して

川田 ミヨ



七月の晴れた朝、バスは市役所前を出発した。同好の参加者はすぐに打ち明け、東講師による文学碑と北海道にゆかりのある作家について造形の深い説明を聞くうちに、和やかで期待感溢れる車中となった。やがてバスは坂道で止まり、「只今から、独歩の曾遊の地に立ち寄ります」の案内でバスを降りた。

そこは夕張の連峰を望み、空知川を見下ろす小高い丘で、年月を経た木々に囲まれた一角に文学碑が建っていた。流麗な文字が読める部分を出し、互いに読み合っているうちに全文が通読でき、ジグソーパズルの最後のピースを埋め込んだような嬉しさに昔の文学青年と少女たちは歓声を上げ、やがて全員で碑文を唱和していた。小径には「国木田独歩曾遊の地」と案内の木札があり、「ソユウ」という初耳の言葉が曾遊の文字とわかり、バスに戻る。

次の目的地である歌志内では、「ゆめつむぎ郷土館」に寄り、炭坑の歴史や当地にゆかりの作家高橋揆一郎の資料などに触れ、氏の父君が講頭を務めていた友子講のこと、講の旗が葵のご紋であるいわれ等を講師から教えていただきました。また、歌志内は三浦綾子さんが小学校教師として初赴任された地でもあり、郷土館を案内して下さった職員のお父様が三浦さんの教え子であった奇遇などが重なり、文学散歩ならではの触れ合いを満喫した一日でした。



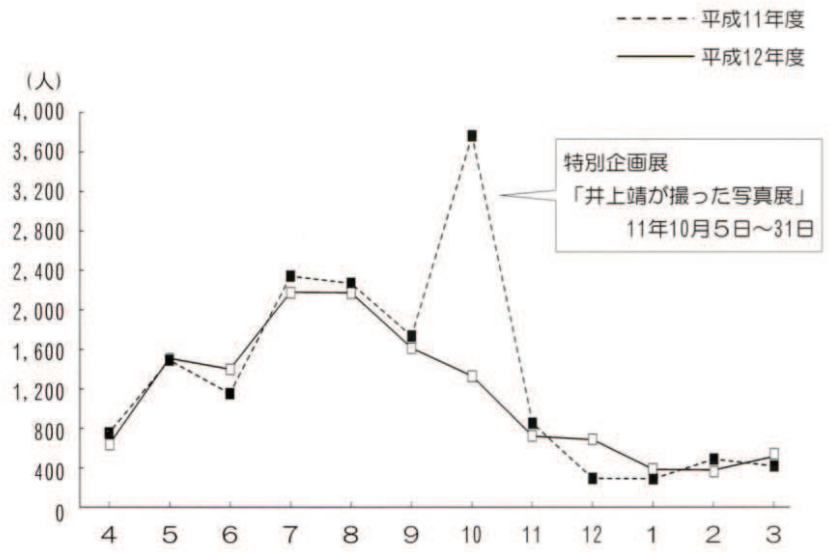
入館者状況



展示室



ラウンジ



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
平成11年度	757	1,490	1,154	2,337	2,265	1,733	3,753	854	298	293	492	422	15,848
平成12年度	638	1,510	1,399	2,175	2,171	1,613	1,329	724	688	388	382	519	13,486

一年間のあゆみ

- 五月二十七日 文学講演会
演題 「井上靖と童話」
講師 宮崎潤一氏
- 六月二日 相談役会議
場所 東京
- 六月三日 喫茶コーナー始まる
- 六月十五日 第一回井上靖記念館運営協議会
会場 花月会館
- 七月十五日 文学散歩
見学先 歌志内市内の文学碑、他
- 七月二十九日 講師 東 延江氏
- ロビーコンサート
演奏 斎藤治道氏
佐藤道子氏
- 八月二十六日 文学講座
講座 第一回
「高村光太郎の青春」
— 『道程』のころ—
講師 片山晴夫氏
- 九月十六日 文学講座
講座 第二回 「島崎藤村の文学」
— 『破戒』から『春』へ—
講師 片山晴夫氏

平成13年度 井上靖記念館事業計画

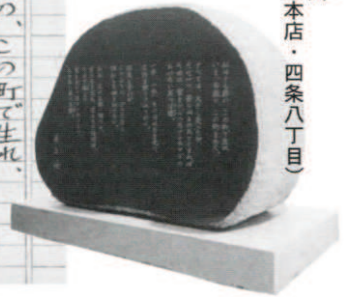
- 5月19日(土) 文学講演会 演題 「道北の文学」
- 6月23日(土) ロビーコンサート
- 7月14日(土) 文学散歩
- 8月4日(土) 親子紙芝居 「しろばんば」の観賞
- 9月8日(土) 第1回文学講座
- 10月13日(土) 第2回文学講座
- 2月2日(土) 第1回読書会
- 2月9日(土) 第2回読書会

詳しくは、後日、こうほう「旭川市民」または、ちらしをご覧ください。事業はすべて無料です。

- 十月八日 詩の朗読とコンサートの夕べ
出演 斎藤治道氏
- 十月二十九日 喫茶コーナー終わる
- 十一月十六日 第二回井上靖記念館運営協議会
会場 花月会館
- 一月二十日、二十七日、二月三日、十日 読書会
作品 井上靖作「風濤」
講師 秋岡康晴氏



井上靖文学碑
(旭川信用金庫本店・四條八丁目)



私は十七歳の、この町で生れ、いま、百歳の、この町を歩く。

すべては、大きく変わったが、ただ一つ、変わらぬものありとすれば、それは、雪をかぶったナナカマドの、あの赤い実の洋燈。

一步、一步、その汚れなき光に、足許を照らされて行く。

現実と夢幻が、このように、びつたりと、調和した例さ知らない。

ああ、北の王都・旭川の、常に天を望む、凜乎たる詩精神。それを縁とる。

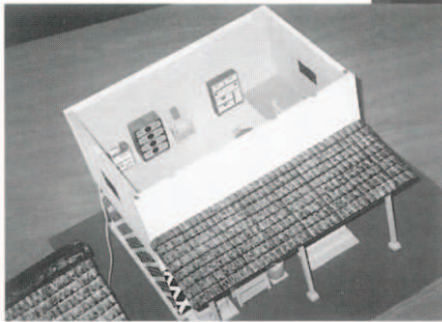
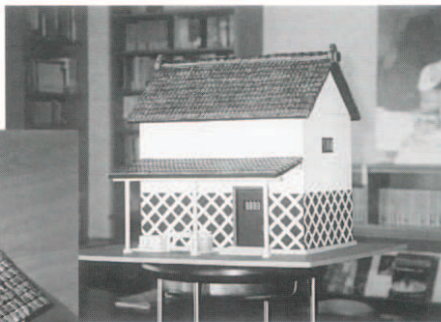
雪をかぶったナナカマドの、あの赤い実の洋燈。

井上靖

■「土蔵」の模型を作りました■

井上文学の原点ともいうべき土蔵生活を再現してみたいと思ひ立ち、伊豆近代文学博物館から資料を取り寄せたり、「幼き日のこと」から関係部分を取り出したリしながら作りました。

物豊かな現代っ子にも当時の生活に興味を持ってもらいたく、手持ちの材料で面白い感じにしました。



この「土蔵」は八月の事業・親子紙芝居「しろばんば」の観賞の時に初公開しますが、井上靖の少年時代を理解する上で役立てば……と思っています。

ご利用マップ



■旭川市内

「井上靖文学マップ」作成■

旭川市には井上靖文学関係の施設が五カ所あります。これをミニチュアにして、市内地図に配置し、所在をわかりやすくしてみました。



市内ミニチュア

編集後記

- ▼例年がない寒さも少しずつ緩み、雪がカサコソと融ける日々を迎えましたが、皆様には益々ご健勝にてお過ごしのことと思います。
- ▼新しい世紀に合せて館報第一号を発行しましたので、皆様にお届けします。
- ▼今までは、当記念館の支援団体が発行する会報と合同でしたが、運営及び活動内容が異なっていますので、館報として発行することになりました。
- ▼今後ともご指導の程、よろしくお願ひいたします。

交通のご案内 あさでんバス

旭川駅前発⑤番 (所要時間25分)
1条7丁目発22、80番 (所要時間25分)
いずれも4区1条1丁目下車 (徒歩3分)
タクシー/旭川駅前から1,600円程度

〒070-0091 旭川市4区1条1丁目
Tel. 0166-51-1188 Fax. 0166-52-1740

開館時間/午前9時～午後5時
(ただし、入館は4時30分まで)

休館日/毎週月曜日
(月曜日が祝日の場合は翌日)
年末年始

観覧料/無料